



TITLE:

## VI.ナショナルバイオリソースプロジェクト

AUTHOR(S):

---

CITATION:

VI.ナショナルバイオリソースプロジェクト. 霊長類研究所年報 2014, 44: 77-78

ISSUE DATE:

2014-12-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/214242>

RIGHT:

## V. 広報活動

霊長類研究所では、広報委員会が下記の広報行事を行って研究所の活動を所外の方々に紹介している。また、リーフレット・ホームページを通じて広報活動を行い、一般の方からの霊長類についての質問や、マスコミ取材の問い合わせにも随時対応している。

### 1. 公開講座

#### 犬山公開講座「サルから知る」

2013年7月27日(土)、28日(日)に霊長類研究所で開催した。参加者は44名だった。4つの講義(濱田穰「アジアにおけるマカクとコロブス類の進化」、香田啓貴「歌うサルのふしぎ」、今井啓雄「味覚と遺伝子」、湯本貴和「世界の熱帯林に霊長類の生活をさぐる」)と、4つの実習(心理「チンパンジー観察」：友永雅己、生態「ニホンザル行動観察実習」：湯本貴和、遺伝「SNPと遺伝子診断」：田中洋之、形態「サルの骨格標本観察」：江木直子)を実施した。

### 2. 第23回市民公開日

2013年10月27日(日)に霊長類研究所で開催した。参加者は51名だった。高井正成の講演「ミャンマーのサル化石：バゴダの国での発掘調査」と所内見学を行った。

### 3. オープンキャンパス・大学院ガイダンス

大学の学部学生を主な対象として、大学院ガイダンスを兼ねた2013年度のオープンキャンパスを、2014年2月19日、20日に開催した。19日は、霊長類研究所にある10分科の教員による講演と、大学院生・研究員も参加した懇談会を行った。20日は、全員揃って所内見学をしたあと、それぞれの参加者が希望する二つの分科の研究室を訪問し、各分科の教員と懇談した。参加者は32名だった。

(文責：香田啓貴)

## VI. ナショナルバイオリソースプロジェクト(NBR)

### 1. ナショナルバイオリソースプロジェクト(ニホンザル)の活動

平成14年度から文部科学省により開始されたナショナルバイオリソースプロジェクト(NBRP)の一環である。自然科学研究機構生理学研究所を中核機関、京都大学霊長類研究所を分担機関として、安全で健康なニホンザルを日本のさまざまな研究機関に供給することを目的として実施している。平成24年度より第3期(5年計画)に入った。現在、350～400頭のニホンザルの3分の2を小野洞キャンパス(第2キャンパス)内で、3分の1を官林キャンパス(第1キャンパス)内で飼育している。

平成24年度より中村克樹を管理責任者として実施している。実績は以下の通りである。1)昨年度設置した推進室の充実をはかった。NBR専属の獣医師を雇用し、これまで以上の質の高い健康管理や繁殖飼育を行った。これまで生理学研究所で行って来た広報活動を霊長類研究所が中心で行うこととした。この目的で、生理学研究所に勤務していた研究員を霊長類研究所で勤務することに変更した。また、全体として増える作業を効率良く処理するために新たな職員も雇用了。2)供給に関しては15頭と少なかったが、これはユーザー希望の年齢まで育てることを実現するためである。実際にこれまでの施設では供給個体を3歳まで飼育することが困難であるため、新たなケージを導入し、飼育室を整備した。3)サルの疾病対策等に関しては、昨年度から引き続き霊長類研究所の個体のみならず生理学研究所の個体を含め、全頭を対象としたサルレトロウイルス(SRV)検査を実施した。4)霊長研からの供給個体に関しては、父親を判定し、情報として提供した。5)広報活動としては、日本神経科学学会・日本霊長類学会・日本実験動物学会・日本分子生物学会等でポスター展示を行い、公開シンポジウムを開催し、HPを用いた情報発信などに努めた。

さらに本事業の将来計画について、NBRP推進委員会や文部科学省ライフサイエンス課からの意見を基に、綿密な計画やシミュレーションを行い、事業規模の見直しを含めた計画書を作成した。

(文責：中村克樹)

### 2. ナショナルバイオリソースプロジェクト(GAIN)の活動

#### GAIN：大型類人猿情報ネットワークの展開

事業名称「情報発信体制の整備とプロジェクトの総合的推進」(大型類人猿情報ネットワークの展開)。英文名称 Great Ape Information Network、英文略称はGAINである。GAIN事業は、平成14年度に文部科学省の主導で発足したナショナルバイオリソースプロジェクトの一環である。第1期(平成14-18年度)と第2期(平成19-23年度)の成果を引き継ぎ、第3期(平成24-28年度)についても、飼育施設と研究者を結ぶネットワークや個体情報データベースのさらなる充実をめざしている。平成25年度も、霊長類研究所と野生動物研究センターの両部局の共同運営事業と位置づけた。落合知美と綿貫宏史朗の2名の研究員が実務にあたった。また親事業である「情報」を統括する国立遺伝学研究所(情報事業代表：山崎由紀子)から厚いご支援をいただいた。平成25年度事業としては、死亡や出生に応じて迅速にデータベースを更新

した。平成 26 年 9 月 1 日現在で、チンパンジー 322 個体（51 施設）、ボノボ 6 個体（1 施設）、ゴリラ 25 個体（9 施設）、オランウータン 48 個体（21 施設）、テナガザル類 169 個体（41 施設）が国内で飼養されている。個体ごとの生年月日や家系情報に加えて、DNA 情報・行動情報についても整備をすすめた。なお、チンパンジーについては過去に日本で飼育された約 1000 個体におよぶ全個体のデータベースが完成しつつある。また、ボノボなど類人猿の飼育状況に関する情報収集を目的とし、現地訪問（米国シンシナティ動物園）をおこなった。近隣アジア諸国における類人猿の飼育や保全に関する情報収集を目的とし、韓国・ソウル動物園の職員やインドネシア・ボゴール農科大学の研究者との情報交換をおこなうとともに、インドネシアでの野生オランウータン・テナガザル等の生息地の視察訪問（グヌンレーサー国立公園・タンココ自然保護区等）をおこなった。以下の HP を参照されたい。<http://www.shigen.nig.ac.jp/gain/>

（文責：松沢哲郎・落合知美・綿貫宏史朗）